



ゴミ拾いから見出す 社会貢献の新しいあり方

突然ですが、皆さんに質問です

これまでにジャンル問わず、何かボランティア活動に参加した経験がありますか？
「ある」と答えた方にはさらに質問です。そのボランティアは自らの意思で調べ、問い合わせるなどしてから参加しましたか？

これは私の経験上による推測ですが、1つ目の質問に手が挙がっても、2つ目の質問に手が挙がった人はおそらく少ないと思います。参加理由は「学校や会社の社会貢献活動の一環で」「知り合いに誘われて」といった方が多いのではないのでしょうか。

参加理由やボランティア未経験者の方を否定するつもりは全くありません。私自身も10年前、あるキッカケがなければ今でもボランティア未経験者だったと思います。そんな私が何故、ゴミ拾いという社会貢献

を仕事にする、ことを選択し、全国規模で活動する組織の代表にまでなったのか。

商店会から生まれた
小さなプロジェクト

私が今年7月より代表を務める特定非営利活動法人グリーンバードは、今から17年前の2002年、東京・原宿・表参道の商店会組合「けぞ櫛会」の青年部のメンバーたちが始めた街のゴミ拾いボランティア団体です。コンセプトは「キレイな街は、人の心もキレイにする」。活動の特徴は、いつでも誰もが自由に参加できるボランティアとして、参加登録や清掃用具の持参は一切不要で、参加のハードルがとことん低いことです。①全員で緑色のビブス（ベスト）を着用、②記念に集合写真を撮る。この2つしか活動のルールはありません。

ゴミ拾いを続けていると、グリーンバード



福田 圭祐

特定非営利活動法人グリーンバード代表

【ふくだ・けいすけ】

1990年生まれ。青山学院大学卒。広告会社を退職後、2017年より現職。アイデアや知見を活かして、ゴミ拾いの枠を超えた団体の新たな可能性に挑戦中。

の合言葉でもある「ゴミのポイ捨てカッコ悪いぜ！」という想いに共感する仲間が少しずつ増え、現在では国内78チーム、海外12チームの計90チームにまで拡大し、参加者数は年間3万人を超える大きなプロジェクトとなりました。

人生初のボランティアは
意外なきっかけ

私がグリーンバードの活動に初めて参加したのは、今から10年前、18歳（高校3年生）の夏でした。進学校と呼ばれる中高一貫の男子校に通い、ラグビー部に所属していました。ラグビー部は全国大会に出場する強豪校であり、まさに文武両道を体現しているような部活でした。恥ずかしながら学業は下から数えた方が早い、乏しい成績でしたが、色んな縁が繋がり、3年生の夏、志望していた大学からラグビーの推薦入試のお誘いを頂きました。



全員で緑色のビブスを着用して活動し、記念に集合写真を撮る。この2つが活動のルール



推薦書に自己PRや志望理由などを記載している、ある記入欄でペンが止まりました。「ボランティア経験の有無」。幼少期から記憶を辿りましたが、やはり何一つボランティア経験はありませんでした。この欄は推薦書においてそこまで重要ではなかったと思いますが、先述の通り学業が乏しい私にとつては空欄で提出するなど許されません。しかし、ボランティアと言われても何をすればいいのか…。

真つ先に頭に浮かんだのが「ゴミ拾い」でした。インターネットで「東京、ゴミ拾い」と検索し、3番目にヒットした団体がグリーンボード。活動場所は、志望大学のある原宿・表参道で、活動日も練習のオフ日と重なっ

ているという偶然に興奮し、慌てて電話で問い合わせました。「へー高校生なんだ。いいじゃん、来なよ。掃除用具とかいらさないから、手ぶらで動きやすい格好でおいで。おーい、高校生が参加したいつてよー」この電話で受け答えをしてくれた相手がグリーンボードの創設者であり、現渋谷区長の長谷部健さんでした。

参加理由は何でもOK!

当日は「ボランティアに参加する人たちと仲良くなれるかな」など不安な気持ちでいっぱい、今だから言えますが「友達にゴミ拾いしている姿なんて見られたらどうしよう」と恥ずかしさすら感じていました。

集合場所に着くと、既に10人くらいの参加者が集まっており、掃除用具を受け取ると、輪になって自己紹介タイムがスタート。周りを見回すと、参加者の面々に驚きました。美容師、音楽家、占い師、主婦、某ジャニーズの人気メンバー、学校の先生、原宿在住の方、大学生などそれまで決して出会うことのなかった方々。

さらに驚いたのが、参加理由がみんな違うこと。「日本のゴミ問題を解決したい!」など熱心な感じではなく、「テレビで見て面白そうだなと思い私も参加してみました」などの理由が多数。自分の番が回って来た時、当初は「日本のゴミ問題に興味があり参加しました」などと優等生を演じるつも

りでしたが、嘘をつくのはやめ、「大学の推薦入試のために来ました。人生初のボランティアです!」と正直に話しました。

初参加で、普段何気なく歩いている道に多くのゴミが落ちていたことに衝撃を受けましたが、一番の衝撃は様々な世代や業界の人と「ゴミ拾い」をきっかけに繋がったことでした。家と学校と予備校を往復する日々を過ごす中、同世代以外の知り合いなど1人もいなかった私にとつて、これまで見ていた世界が一気に広がった感覚でした。

私がゴミ拾いを続ける理由

次に参加したのは高校3年生の冬。部活も引退し、周囲は大学受験の真つ只中。一足先に大学受験を終えたものの、自分だけ遊んでいることに後ろめたさを感じていました。

そんな時、グリーンボードの存在を思い出し、時間は有り余っていたので原宿だけでなく他のチームにも参加することにしました。みんなに覚えてもらおうと黄色いパーカーを着て参加しましたが、高校生というだけで当時は珍しがられ、目立つ服など着る必要はありませんでした。歌舞伎町チームでは現役のホストやLGBT当事者の方がリーダーを、吉祥寺チームでは音楽アーティストがリーダーを務めるなど、各チームにそれぞれ違った色があり、毎日が刺激的でした。

そんな中、一番珍しがられ、一番面倒見て頂いたのが赤坂チームでした。当時は先日グ



タピオカドリンクの容器があつという間にゴミの山に。ゴミがゴミを呼ぶ

リンバード2代目代表を退任された横尾俊成さんが広告会社・博報堂の社員として赤坂チームリーダーを務めていました。朝の出勤前の時間帯に活動しており、大学生すら1人もいないチームだったため、そこに高校生が参加することは本当に珍しかったと思います。プライベートでも弟のように可愛がって頂き、本当に沢山のことを学ばせてもらいました。

高校卒業後、大学生となり環境が大きく変化する中でも、ゴミ拾いを継続できた理由はこうした色んな人との出会いがあつたからですが、一番は自分がこの活動に参加する意義が明確になったからです。それは、グリーンバードを友達にも知って欲しいと思い、SNSのブログ(日記)に投稿した時のことです。日記に対して、今までで一番多くの「いいね!」や「コメント」が寄せられ、コメントの殆どが「素敵な活動だね! 私も機会があれば参加してみたい!」といった内容でした。ゴミ箱が近くに見当たらず何処かにポイ捨てしようとした時、友人にゴミ拾いしている奴がいたなと思いついてくれたら、そんな気持ちで書いたつもりだったので、この反響はかなり予想外でした。

キッカケさえあれば、参加したいという人は同世代にも沢山いる。活動している団体があること、参加する機会がすぐそばにあることを皆が知らないだけ。「1人でも同世代の仲間を増やしたい。そのためには自分自身が活動を続け、周囲をどんどん巻き込

んでいこう」。ゴミ拾いに参加する理由が明確になった瞬間でした。

社会貢献を仕事にする

大学卒業後は広告代理店に就職しましたが、いつかは社会課題を解決する仕事や、まちづくりに関わる仕事をしたいと考えていました。

ちょうどその頃、横尾さんからグリーンバードの話を聞く機会がありました。企業や団体とコラボレーションしてゴミ拾いを面白くする企画や、地域を盛り上げる企画など、ゴミ拾いの枠を超えた活動をどんどん仕掛けており、ポイ捨てゼロの社会からゴミ拾いが地域を支える社会へと、もう一歩先のステージに歩み始めているのを感じました。「社会貢献×まちづくり」。いつかそんな仕事に挑戦したいと考えていた私にとって、とても魅力的であり、3代目の打診を受けた時は迷うことなく引き受けました。

ゴミがゴミを呼ぶ

設立当時に比べると、街からゴミは減ったと言われますが(当時は45リットルのゴミ袋が20袋、現在は10袋程度)、それでもまだ街にはゴミが溢れ返っています。1年前からゴミ拾いの際に参加者全員でタバコの吸い殻の本数を数える取り組みを始めましたが、今年6月には過去最多の1971本(活動時

間は40分、参加人数は20人)を記録しました。

吸い殻だけでなく他のゴミも深刻であり、話題となつているタピオカドリンクの容器はやはり目立ちます。路地裏などでインスタ映えを意識して写真を撮つた後、そのまま置いて行ってしまう人が後を絶ちません。すると、そこに次々とタピオカ容器や他のゴミが捨てられ、あつという間にゴミ山が完成します。「みんな捨てているから、1つくらい増えても大丈夫だろう」。類は友を呼ぶのであれば、ゴミはゴミを呼んでいます。

原宿・表参道には13個ものゴミ箱が設置されていますが、そのすぐ近くでゴミが大量に捨てられている光景がよく見受けられます。意識しないと視界には入らない。私たちの活動も同じで、せつかく素敵な活動をしているのに目立たなければ、ポイ捨ての啓発はできません。一生懸命に拾うことも大事ですが、楽しく会話しながら活動してもらい「みんな捨てないから、私も捨てない」「みんな拾っているから、私も拾う」そんな空気を街中に作りたいと思っています。

ゴミ拾いが地域を支える

今、私が特に注力しているのが、掛け算コラボレーションです。私たちの活動には音楽、ファッション、IT、スポーツなど全ての分野と掛け合わせられる可能性がります。音楽とコラボレーションすれば、音楽好きな人が参加する。これまでゴミ拾いと



西日本豪雨では、岡山チームのメンバーが現地で支援活動を行った

関わりのなかった人に参加してもらうためには、その人たちが参加したくなる理由、きっかけを提供することです。

この掛け算において重要なカギを握るのがコミュニティです。都心部では隣に住んでいる人の顔や名前を知らないことが当たり前になってきており、地方では若者の人口が減り、地域を支える担い手が不足するなど、地域のコミュニティ欠如^①は日本各地で深刻な社会課題となっています。人と人の繋がりが希薄になってきている今、私たちの活動がこの社会課題を解決できると思っています。

実際、各地でゴミ拾いを通じた地域との繋がりが生まれており、街づくりに関わることが増えてきました。地域を盛り上げたかと思っても、親の世代から繋がりがなければ町会や商店会に入っていくことは非常にハードルが高いですが、継続してゴミ拾いをしていけると地元の方から声を掛けられ、お祭りに運営側として参加したり、新たなプロジェクトを立ち上げるといったこともあり、ゴミ拾い活動の運営責任者だけではなく、コミュニティリーダー^②という役割を担う人材がグリーンバードの各チームから生まれ、地域との新たな繋がりをどんどん築いています。

昨年7月に発生した西日本豪雨では、岡山チームのメンバーが災害翌日から現地で支援活動に携わり、迅速に救済物資の手配やボランティアアツアツ^③を実施することができました。ボランティアアツアツでは岡山チームの

メンバーがコーディネーター役を務め、現地での支援活動の調整だけでなく、岡山県の観光客激減という課題に対して、ボランティアを終えた夜は参加者全員で街を散策したり美味しい食事を堪能するなど、観光プランをアレンジしてくれました。

新たな挑戦とこれから

私たちのゴールは、活動を終わらせることです。捨てる人がいなくなれば、拾う必要もなくなりません。そこで最近では、「ゴミ拾いの一歩前」「ゴミを分別してゴミ箱に捨てる」という啓発活動にも取り組んでいます。

今年9月に自国初開催を迎えるラグビーワールドカップに向けて、昨年から「ゴミ袋でトライ! プロジェクト」を立ち上げました。これは袋の上下を結ぶとラグビーボールになる仕掛けのゴミ袋を来場者へ配布し、会場内には芝生を敷いてミニグラウンド^④（ゴミ箱）を作り、ゴミ袋をトライ（捨てる）してもらおうという内容です。

これまで様々なスポーツで会場のゴミ問題に取り組みしてきましたが、「どうすれば皆が自主的にゴミ袋を受け取り、捨ててくれるか」を軸に考えていた矢先、ゴミを捨てるという行為に「楽しさ」を掛け合わせるアイデアが浮かびました。「記念に帰りたいから、ゴミを出さないようにしましょう」「人生初のトライとなりました!」など沢山の方から声を掛けて頂き、ファンも選手



ラグビーワールドカップに向けて立ち上げた「ゴミ袋でトライ! プロジェクト」。芝生を敷いてミニグラウンドを作り、ゴミ袋をトライしてもらう仕掛け

も皆で取り組むゴミのないスタジアムづくりの実現へ、確かな手応えを感じました。

サッカーワールドカップでは日本人サポーターによる試合後のゴミ拾いが世界中から賞賛されましたが、観客全員がゴミを持って帰れば、そもそも拾う人は必要ありません。グリーンバードも同じで、最終のゴールは私たちの活動が必要なくなることです。ゴミ拾いをしていると、外国人観光客から写真を撮られ、海外メディアでは「ゴミ拾いは日本独自の文化」などと報道されています。私はこれをチャンスと捉えており、来年には東京オリンピック・パラリンピックも控える中、国内だけでなく海外にも視野を広げ、ゴミ拾い文化をしっかりと伝えていきたいと考えています。そのためには、1人でも多くの仲間が必要です。社会貢献をしたいと思った人が気軽に参加できる機会を、私たちはこれからも用意していきたいと思っています。